

# イースター（復活日）礼拝 説教 「主が共にいますところ」 要旨

日本キリスト教団藤沢教会 2021年4月4日

## マタイによる福音書 28章 1～10節

イースターおめでとうございます。コロナ下にあつて、今年も満開の桜の中で、ということはいけませんでしたが、「天に花 地に花咲く イースター」、花々に囲まれ、命の息吹を感じながらのイースターは、私たちにとってはやはり特別なものです。そのため、毎年、清々しい気分でイースターを迎える方は多いことと思いますが、ただ、コロナ下にあつてはいつものようにというわけには参りません。しかし、主の復活の祝いの時から新しい年度を始められることは、やはり私たちにとっては嬉しいものです。ただし、私たちがそのようにイースターを喜ぶのは、験を担いでのことではありません。十字架へと向かう主イエスと最後の一週間を共に過ごした私たちにとって、イースターの喜びは、主のお言葉が実現したということであり、つまりは、罪赦された者として、私たちは今年もイースターをこうして共に祝っているということです。それゆえ、このことは、コロナ下にある私たちに大切な事実を告げ知らせます。それは、コロナ下ゆえに受ける様々な影響は、私たちの罪ゆえのものではないということです。なぜなら、私たちがコロナ下を生きるということは、神様の裁きによるものではなく、その反対であるからです。

この時の私たちのあふれる喜びは、私たちがキリストの命に生かされていることを告げ知らされているからです。それゆえ、何人であろうとも、キリストの命に生きるこの喜びを私たちから奪い去ることはできません。それが私たちがイースターを祝うということでもあるからです。そして、私たちが自らについてそのようにはっきり言えるのは、主の復活がどこか遠い異次元の場所で起こったことではないからです。十字架と復活の出来事は、私たちの生きるこの地上で起こった出来事であり、まただから、この地上に生きる私たちは、イエス様が今も共にある、今この時私たちと一緒にいてくださっていると、自らの言葉ではっきりと語る事ができるのです。それゆえ、十字架と復活の出来事がこの地上で起こったということは、私たちの信仰において

とても重要です。今日の御言葉がその点を特に強調して私たちたちに語るのそのためです。ですから、この地上で起こったということから、私たちの信仰はそういう意味では現世的なものだと言えるのでしょ

うです。そこで、早速御言葉に聞いて参りたいと思いますが、28:1では、「安息日が終わって、週の初めの日の明け方に、マグダラのマリアともう一人のマリアが墓を見に行った」とあります。それゆえ、この二人のマリアが墓を見に行ったというところに、私たちは二人のはっきりとした意思を感じるわけですが、それについて御言葉はまた次のように語ります。28:4に「番兵たちは」とあるのは、イエス様の葬られた場所を番兵たちが見張っていたからであります。そこにわざわざ行ったというのは、この二人が、三日目に甦ると仰った主イエスの言葉を重く受け止めていたからです。つまり、この二人は、イエス様の言葉にそれだけ期待を寄せていたということでもあります。そして、その背中を押したものが十字架の出来事でありました。つまり、この二人は、イエス様の甦りが、あちらの世界のことではなく、私たちが生きるこちら側、この足下で起こることを確信したということです。だから、いても立ってもいられなくなった。そして、それは私たちも同じです。だから、私たちはこうしてイエス様の甦りを信じることができるし、また信じていいのだと、そのようにいうことができるのです。それは、この地上で起こったことだからです。従って、この日の御言葉が私たちに語ることは、イエス様の復活の出来事が、そういう意味で徹頭徹尾現世的であるということです。ただし、この「起こったこと」を信じるというについては、御言葉は人々の関心や期待感の高さに訴えるのではなく、それとはまた別の角度から、この「信じる」ということを語りかけようとしているのです。

そこで、皆さんにお考え頂きたいのですが、「起こったこと」を信じるとは、どういうことなのでしょう。私たちが

よく分からないものを信じようとするときには、特に、信じていいのか悪いのかがよく分からないときには、じっくり吟味しようとするものです。そして、そのようなときに私たちが手を伸ばしたくなるものが薬の効能書きのようなもの、つまり、能書きのようなものなのもかもしれません。そして、御言葉がまさにそのような中で私たちにイエス様の甦りを語ろうとしているとしたら、御言葉は、いわば能書きを語るようなもの、自分は知っている、自分は見たと、自慢話をしているに過ぎないものになってしまいます。つまりは、自分たちはどれだけ多くのことを知っていて、どれだけ多くのことが分かっているかと、自分の持っていることを誇ろうとして、イエス様の甦りを語ろうとしているに過ぎないということになってしまいます。そして、特異な経験をした人々が往々にして陥りやすいところはそういうところでもあるのでしょう。事実を一つ一つ積み上げていって、自分にはこれだけの確証を得ているから、だから、自分の考えていることは正しい、そういうことでもありますが、ところが、この日の御言葉は、そういうものとは明確に一線を引いて、この「起こったこと」を信じるための、それとはまったく違う道筋を私たちに示すのです。

御言葉は、マグダラのマリアともう一人のマリアがイエス様の復活を経験するための切っ掛けとして、特異な経験の必要性を語るのですが、それが、28:2 以下に記されていることです。そこにはこうあります。「すると、大きな地震が起こった。主の天使が天から降って近寄り、石を脇へ転がし、その上に座ったのである」と御言葉は語るのですが、二人がそれを必要としたのは、イエス様の甦りを確かめるためには、イエス様を葬った墓の中を見る必要があったからです。ただ、その場にいた番兵たちが震え上がり、死人のようになったとあるように、この突然の出来事を冷静に受け止めることのできる者は、恐らくは、そう多くはないのでしょう。そして、強い意志を持ち合わせこの場を訪ねた二人の女性もその例外ではありませんでした。突然目の前に現れた天使が先ず語ったことが「恐れることはない」という言葉であったように、二人は、この突然の出来事に言葉を失ってしまったのです。そして、この恐れがありますが、天使がその直後にこの二人

に、かくかくしかじかと、自分が突然現れた理由を説明し、その上で、「急いで行って、弟子たちにこう告げなさい。『あの方は死者の中から復活された。そして、あなた方より先にガリラヤに行かれる。そこでお目にかかれる』確かにあなた方に伝えました。」と、天使はこの二人にしかできない大切な使命を託すのですが、ところが、その直後に記されていることは、「婦人たちは、恐れながらも大いに喜び」ということでした。つまり、この特異な経験によって、恐れは完全に払拭されることはなく、そのまま残り続けたということです。けれども、それは、死人のようになったとある番兵たちのようにはなかったということです。

「起こった」ことを信じるということとは、そのありのままを受け入れ、信じるということです。そして、私たちにそれが求められるのは、事実は事実として変えようがないものだからです。しかし、そこで、人が考えることは、その恐怖心を少しでも和らげることです。そのため、起こった事実を少しでも受け止めやすい方向で修正したいとの思いに駆られるのですが、けれども、御言葉がここで求めることは、事実を修正し、分かりやすくすることではありません。変えられるべきは、震え上がるこの二人であり、「恐れながらも大いに喜び」と記されているのは、ただ恐ろしいだけであった二人が、少しずつ変えられていったということです。そして、そこで恐れ喜ぶこの二人がしたことは、事実を伝えるべく、急ぎその場を離れたということでもあります。このことはつまり、二人を震え上がらせたこの事実は、水増しされたり、削られたりはしなかったということです。つまり、変えられたのはこの二人であって、そのために求められたことは、薬を飲むかのように、何かを足したり、加えたりすることではなかったということです。むしろ、それとは逆です。恐れがそぎ落とされればこそ、そこに喜びが加わった。そして、水と油に等しいこの気持ちが二人の中で一つになっているのは、そぎ落とされた恐れによってそこに余地が与えられたからです。そして、それは、意識してそう言ったと言うことではなく、気がついたらそうになっていたということです。従って、私たちの信仰とは、そういうものであり、足したり、加えたりするから、確信が持てるわけではないという

ことです。震え上がり、それでもなお、聞こうとすると、余分なものがそぎ落とされて、そこに、喜びが沸き起こってくる、そういうものであるということです。ただし、そこで湧き起こった喜びは、喜んで終わり、ということではありません。まだ半分、いや、それ以下なのかも知れませんが、二人はまだまだ恐れに包まれているのです。けれども、闇の中に感じた一筋の光を大いに喜ぶのが私たちの信仰だと言われているように、闇はまだ深いのです。それゆえ、この二人の女性が大いに喜んだと言われていることは、まだまだであったということです。そして、それは、私たちの信仰が、小さな喜びで満足するようなものでもなく、また、ぬか喜びで終わるようなものではないからです。なぜなら、様々なものがそぎ落とされる中で大きくされるものが信仰の喜びでもあるからです。

それゆえ、喜びは、一度限りのもので終わるものではありません。イエス様の甦りを弟子たちに急ぎ伝えようと走り出したこの二人の前に、イエス様は現れ、そして、この二人に「おはよう」と声をかけたのですが、すると、二人はイエス様の足にすがりついたことから、その喜びの大きさが分かります。けれども、そこでイエス様が真っ先に語ったことは「恐れることはない」というこの言葉のように、信仰ゆえの喜びとは、私たちが喜びを味わい知るために不要なものを一つ一つそぎ落とされるものでもあるのです。けれども、一つ一つそぎ落とされるものは、溜まった垢をそぎ落とすようなものではありません。イエス様の甦りを経験し、それで終わりと言うことではなく、この二人は、その喜びを伝える使命に与っていたのです。それは、時間を献げることであり、その労を負うことであり、さらには、そのことによって、ぎゅっと握りしめて離したくないと思うものを手放すことです。つまり、大切にしているものを奪われるに等しい経験をすることであり、傷を負い、痛みを感じることもあるのです。そこで、ちよっと横道に逸れますが、テレビの中で、ある若手の学者が次のようなことを言っていたのです。「人を傷つけない言葉が本当にいい言葉なのか。人を傷つけることのない言葉ほど面白くないものではないか」とその若手の学者は言っていたのですが、もちろん、だから人を

傷つけていいということではありません。そういうことではなく、この若手の学者が言いたかったことは、通り一遍の、どこにも刺さらぬような言葉は、ただ消費するに過ぎず、人の心に残ることはないし、人を生かすこともない、この若手の学者は、言葉の持っている可能性を、傷つくことがある、というところから語りたかったんだと思います。そして、それは、この日の御言葉が私たちに語りかけることもそうです。

イエス様の甦りとはつまり、私たちの罪の重荷が落ちた、取り去られた、神様が私たちにそのままいいと仰っている、そういうことです。つまり、我が神、我が神と断末魔の叫び声を上げ、私たちのすべての罪を負い、十字架の上でうなだれたイエス様が甦られたということは、私たちの罪のすべてがイエス様の肩の上ですでに乗っかっているということです。そして、それが、神様に赦されているということであり、それゆえ、私たちが、自分が罪人であるかないかを自分で決めつけようとするのは意味のないことです。けれども、それは、私たちが自らの罪を見ないということではありません。本当に大丈夫か、それとも、と揺れ動くことであり、この二人の女性が、喜びつつも、その恐れを捨て去ることができずにいたというのはそういうことです。それは、この大丈夫かとの思いは、どこまでも私たちの中で残り続けるものだからです。まただから、そこで、私たちは、確証を得ようとするのでしょ。これで大丈夫、これでいいと、そう思える理由を自分の中で探し出そうとするのでしょ。けれども、そうであるからこそ、神様は、この二人に空になった墓の中を見せたのです。それは、もう詮索する必要はない、自信を持つ持たないに拘る必要はないと、確証を得たい、得なければと、そういう自分自身に拘る私たちの思いをそぎ落とそうとしているからです。

ただ、そのためにまた、私たちは時に痛みを覚えることもありますし、疲れて立ち上がれないこともあるのです。御言葉に聞くということが現世的であるというのはそういうことです。それゆえ、自分の思いがそぎ落とされる時には、当然、痛くないはずはありませんし、疲れを覚えないわけでもありません。しかし、そこで私たちが感じる痛みや疲れは、恐

れるこの二人にイエス様が「行って、私の兄弟たちにガリラヤに行くように言いなさい」と命じているように、イエス様のお言葉の重さを知り、このお言葉に従おうとすることです。必ず喜びへと変えられていくことになるのです。そして、その場所が、ここでイエス様が仰っているガリラヤというところでもあります。ガリラヤは、イエス様と弟子たちが多くの豊かな時間を共にした場所です。そして、弟子たちは、そこで山上の説教と言われている、イエス様の大切な言葉をいただいたのですが、ただし、再びそこに戻り、そのイエス様の言葉を思い出し、そして、それを実際に行うということが、弟子たちをして直ちに喜ばせることになったのでしょうか。喜ばせるどころか、苦しませ、悲しませることにもなる。なぜなら、それは、貧しくあることであり、悲しむことであり、その上でなお穏やかであることが求められるものだからです。それだけではありません。義に飢え渴きながら、人を労り、そして、心の中に一切の澱んだものを持たず、神様の御心をこの世にあって実現することでもあるからです。それゆえ、イエス様のお言葉に徹底して従うことは、自分だけが辛いだけでなく、時に人から煙たがられ、爪弾きにされることにもなるのでしょう。けれども、イエス様は、それを幸いであるとして仰るのです。なぜなら、「私のために罵られ、迫害され、身に覚えのないことであらゆる悪口を浴びせられるとき、あなたがたは幸いである。喜びなさい。大いに喜びなさい。天には大きな報いがある」と、このように弟子たちに勧めているように、イエス様のお言葉に従えばこそ、私たちの向かい行くこの先には、天の御国の扉が大きく開かれているからです。

従って、イエス様の甦りを経験したものが急ぎ向かうべき場所は、イエス様のこのお言葉が語られた場所です。そこにイエス様は共にいてくださり、そして、そこに生きるのが罪赦された私たちであるのです。それゆえ、私たちが、このいるべき場所に生きなければなりません。それは、そこにいるということが、私たちからいろいろなものがそぎ落とされることにもなるからです。そして、それはただそぎ落とされるということではありません。そぎ落とされたもののすべてを受け取ってくださるのが私たちの神様であり、イエス様でもあるのです。つまり、

それが、神様にお献げするというものであり、それゆえ、当然痛みを伴うことにもなるのです。そして、この痛みは、私たちがイエス様の甦りを喜びへと変えるために必要なものです。先ほど、私たちの信仰が現世的であると申し上げたように、私たちの信仰は、ただだから、口先だけの底の浅いものにはならないのです。そして、このことはまた、パウロが私たちの国籍は天にあると述べているように、現世的であるということは同時に、その場限り、その時限りのものではなく、天に繋がっているものであるということです。まただから、地上にありながら天に軸足を置くがゆえに、時にその足下がぐらついてしまう。それゆえ、そうなった場合、私たちは、当然痛みを感じることもなるわけです。しかし、そこで私たちは一人痛みを負うのではありません。イエス様と痛みを分かち合うからこそ、私たちと神様、私たちとイエス様との関わりは深められることになるのです。そして、それは、神様とイエス様だけではありません。

こうして御言葉に聞いているのは誰なのか。私たちが関わるすべての人々との関わりの中で、イエス様のお言葉に聞いているのがこの場にある私たちであるのです。このことはつまり、喜びも恐れも、さらには、その痛みをも共に分かち合うものであるからこそ、御言葉を共に分かち合う私たちの関わりは強められ、深められていく、だから、この強くされること、深められていることを聖書は喜びと述べていると私は思うのです。そして、イエス様がこの二人の女性と弟子たちのことを、ここで兄弟姉妹と言っているように、兄弟姉妹の関係とは、つまりはそのように喜びを分かち合うものであるということです。ですから、イースターは、それが地上で起こったということを知らせるものであり、また、私たち一人ひとりが、そのように甦りのイエス様を信じるがゆえに、私たちの互いの関係は深められ、また強められていくことになるのです。それが私たちがイエス様の復活の命に生きているということであり、そういうところに私たちは今生かされているのです。ですから、最後にもう一度申し上げたいと思います。イースターおめでとうございます。祈りましょう。